



夏古白集秋之部

立秋

流ゆく芽の痛き志るわけさの秋  
露とめく臍もまやうはれ秋  
秋の月や一むらぬ乃糸より  
虫の音れ下前字やと船乃株  
忘るは秋の川船かくうか

一葉



何げなのよきふかより一系がれ  
曆はく言く相の一系うふ  
糸ききて琴も志るや相乃秋

七夕

明やすき藤はまらん星に  
鶴や橋よりあかりてらなつし  
星より琴うるく文の流るは  
音月や妻越みれくくさ

星より秋の星忘るく臨川は  
小舟とくく

星をよきは橋うけよくやこき  
仙舟れんくくくめく終て

長居く星の一転みくく先  
七種や昔ようめを秋よりあ

八日星

立琴も森せりや星の二日碎

秋系

葦や秋を船うらやうれあり  
あさうほやねまかろしの懶を  
我そのよまおをさひひー女命  
姨於母うらひもそり女命  
荒牧れ中より渡りてをまし

夫の井や

夫の井やねをまらぶ志のま

阿房宮賦をよむ

鬼灯やニ子人乃秋れこ志  
葵の花風れのちをさうり  
松風れを根ある落う非  
淋ーさの初くうはを死か  
くをあもかくてはさひー鳥爪

魂系

月をよと人の顔あり玉まの  
世の中や朝もくまに魂まのり

亡師の勅美とむく

追火やあふひふちをぬきの  
けきふ懶はくをさそ 吳海川王  
人のきく音とありは 玉糸

燈籠

あふ松より秋あり言燈籠  
燈籠の中うらふひー揚燈籠  
燈籠や身をうつる風のお

燈

秋風より人まのあむく 燈の影

糸のく

あふ人馬をたよりぬ

稲妻

稲妻や園より浅く子破乃園  
いふ川浦や松の表裏のかくを

冬籠

川流の落しきういふこく

奥列地田玉川

追立く冬74ノ川子

稻

夕風や露もこう稲むら

後府竹林精舎

けあろ推せよ花子み家一色  
紫陽花とみ花子盛るや草まら  
この二白と父母み

川う子田つとも嬉し

鳴子

引あけく松の身軽や鳴子  
活き居る身ぬらうら

流る

秋風の身を切りと流る  
身細くこべし減る流水

葉山子

人出たりやめれ立家桑山子哉

河内路より

楠れらうひをせふ家うらふ

秋縄

版を道と遠く来るなり秋の縄

秋蝶

らふ見道くやりめみなる秋の蝶

草外より去りてやうらや秋の蝶

虫

日暮てもけを綿なり虫の声

眼を明く豆森をうらむ此声

十とうり耳ある秋の虫乃く念

虫の音やけをけしけく虫は

我新此髪より志む虫やさるる

冬風の揚を川をきりく虫

阿道穿く履ぬ虫なりきりく

人ちうに命よありぬきりくす  
朝や蟬を懐事家 秋の声

文月十日ありて天府船君に在侍  
西原の舟にありてふくしき風にていささ秋の思  
懐ふればありてはささくさくの人を思ふ事

虫よりく末の家形あり砂糖あり

蜻蛉

うく系れ日ありおきて蜻蛉哉

旁

是米家とぬ穂を川旁るより

松遊み

朝旁や初より庭のふ松一海

秋風

秋風やうりそあるは一系より  
秋風より片好秋ふ如蝶々舞  
秋風中人よりけしは松の系  
秋の風更甚きを忍び侍より



高館懐古

前後の戎衣一よりおさゆり平泉の  
さうんちやとらんやう大路は車のりあま  
取有りた右の家かこい朝む山ひら  
ちきりそいといめそそ一蟻のこく丹  
あつはまの人も顔あつてはるるうそよ  
いはちひしんもあつてはけきりめを  
合鞍ますさうりたをやうをる女房は  
銀笠をさすり系よゆる柳を山所を  
こころみ琴れをたやまは月う海家  
ゆるおのさるうは神をむるう一雲を

加く程四角は風をといこ一衣は雲ハ  
ゆふともまたきり一このそとい川こ  
式部う離情を流く一海門ハきりこ  
まきこを波をうちり道と源をこ  
流をそくなく流あつてもれこし月の  
山をかうれり一清白山うはるのあけ  
不のをかりふ玉もや梅室根山たを  
志保山をさるれのもよそひえいあせ乃  
こころハ海こきすれいあせ鳴きり  
いとわれ里も本立志くこ令鶴山ハ  
あつ門きを教して時さうはるを

白集

和をりしゆの似しをりし色紙と此堂塔  
 四十余禪房の百餘宇中寺舎色  
 堂經堂吉祥堂ありし神社仏閣  
 山く日く映し月くうやく  
 ふうんはくむの梅と義生和泉之舟の  
 岩小く碧流岸をくち水上門は  
 萬く言能くしそやり源延尉は  
 加しは文と休屋しきくハ虎星の  
 小辰を遠るさあままきうし  
 らみこく川まの秀働一門の榮耀  
 さくくくくもあはれ口張

あまんとくは風を裂麟をりる  
 目をうらこくくあまは天志  
 梅花を冬れさくもまきこ乃  
 とくくくわられくくくく  
 落く九卒のちきくく秋を視  
 飛は十符は浦くく代をくくさ  
 しもきく今た

山をく之川かうれ多り秋は風

仙臺寺記定之居首別

名くり川細くかうれく素純の

あをこころに  
新もおりひ

跡先くしりさうきく  
持ぬ秋のう珠

秋浦吟

秋風中候もあひく  
されさき

必親主人の宋亭  
くすれ結

干るある程  
秋乃風

秋柳

いそりや  
菱柳

花野

阿し  
追剥  
花野

秋夜

合歌の末  
老の秋

須磨

宿信  
秋

浪傍湖水

秋の水は富士をむくくしむ

ある人よりかきかき

喰く志る七玉川や 船舳秋

上総子種溪

志る波の滯りあはし海や子種

落

白雲此果をありし里六玉川

農家の八十の老を笑し

糸の秋杵ありあける翁のれ

秋暮

乃同を一里くくと秋の暮

鐘はさよ乃向るも忍えて秋の暮

潮見坂

舟くく海とけ見えぬ秋の暮

暮をく川顔見念せく秋のくれ

賦秋と墨淡に描く

木母を力なりなり秋のくれ

家房紙客と立ちや秋の暮

言帆楼

於より改帆をく縁と秋乃暮

言敏毛越寺懐古

礎越かそく阿中して燦の暮

蒼麦花

燦雪の目も塩屋和蒼麦花

薑椒

傾城此糸屋おそあー薑椒

瓢

うこのくとまこ花の何るやうか

厚

二好く〜うそて悲し厚を〜

初厚や平砂よ〜やさ肉の裏

初原や小斗と落家名のうへ

小鳥

連雀や心より志より松乃中  
野に來るく一荒ふ由侍此山うか  
心よりの一羽よりぬ屋も侍  
朝しきハくくあま守や四十雀

文殊寺納

山雀や文殊の智慧のむねくらり

武庫山

武庫山の眠さやすかこころを

下総浦江のひ二句

朝風や小雀のこぼるるを侍し  
鶴鶴や潮來をくして思つてひ

芭蕉

さむしき此處の指無く芭蕉は  
深うぬく我と別くを世に

柿

おきく時めく柿の木来りぬ  
根柿や代々の家にも撰師

結音

結音やとら後くしり女高き

良秋ちうきふき且う温泉のふよ  
のそ遠き

おれ時そちう向ふそあきむむけ

良夜

おとせくお母お山の入秋うぬ  
おと山おのぬおくうふの月  
名月れさうしと照や岩間あ  
名月や草むきもよもすし  
名月や汐満来とこくはる  
名月や福くもふえり花よき  
二列櫓を核石あは  
うかうさ守枝の櫓やうふの月

田舎のあそび

浮雲のつらきやうなる月  
借はるく八百屋の門やうの月

深川舟道遠

川より船中や月の夜とをせぬ  
中より一本松もきつ一本松もきり

十人の月見此友や松をきり

麻呂

名取を神代の富子舟見の月

名月や何故く喜もはしき

名月やあつとくしとあつと

名月や生れかりしと名取松

名月や月よりおもしろい

名月や漢村の松乃舟見の月

名月や蛇をけき風もあつと

一谷

舟をよりの舟をよる波や次への舟



十六秋

紫屋さしき

いさよひや園くあまの麻の声  
十六秋のあまの園の情さしき

初汐

夕汐や竹の露月人乃声

初分

今届る面吹つて初分うぬ  
岩端に響吹く初分うぬ

初途

旅人のくしと振る初途  
初途や日やけて甲斐の道おのこ

相撲

大内れ砂をとく春や相撲と重  
志のくしと春さしき角力さ  
女と振首持りさしきさしき  
こしり子やん目のあまお撲と重

暇江亭

相撲を白おしこいこる庭の秋

夜を 新編

才分を喜ぶさ 芦花は秋を  
竹葉を枝葉者の秋を  
四十を酒のそ 帯ふ秋を  
里を今綿あらし した日和哉

菊

花をさす秋をさすさす  
そのいそは 客と喜ぶさ  
傾城は枕をさす 菊はさす  
あの露をさすさす 石は  
白菊や花のさすさす  
蝶をさすさす 蛤は  
ひと糸をさすさす 阿は  
舌をさすさす 菊は酒

漢村正陽

魚の名も菊色く此志川くふ

木曾路

家くく祖父ある菊の山路哉

婆心公少々

去々菊やあやうし此花よ夢跡

白くくも浮世の吾意や葉阿りせ

後月

若くく菊れ多りや十三夜

懶はぬん多種あり後の月

白魚れうんこくくや乃志の月

稻穂て里志はくあり後れ存

合沃く

隈く無海士の横大や十三夜

新蕎麦

新蕎麦とくく之意の夏のうち

新そと和能後く悟る梅の音

草

草枯や月の干浮の小松を

尾鉄鴨

尾を鉄く命いそく鴨れ声

く枯

く枯や迹ぬあまは丸木橋

く枯や月の夜よりも日のありき

紅葉

丸木を中より世心のあまきうか

掃きもすくすくひー夕紅葉

新居く江さうき葉の紅葉か

人あーの改うちをるりもこの肌

詠物秋文

死よりも紅葉あまはこころ深う静

志の月さ徳聖子の庭よま七色の

白紙下

五

厚くうきあり

厚くうきや幹を花瓶よ初紅糸

礎

是よりしき年波よせる礎うれ  
を里の朝よ出まてきぬさうね  
目よりし月の裸や小萩さぬさ  
精さうか家より礎れ柏さうね  
あさひよの宗居よりさうりさ

秋風や豊れ袖味留も梢より

登うけそ袖味留のうきそ萩さ

麦世氏のを眺橋より

ささほしそ長月比れ花火うれ

麻

くまの糸とこそきけ麻の糸

麻れ喜や多るしおろそふれ川

新酒 濁酒

山紫と夕紅の候より極く

新酒あり 船は船は雨をせん  
隈ありとのとむおれふらう酒

原水

帆のうらふそのみおけり 落し水

九月

秋風と来りしの出帆入帆の風  
綿ふくく軟ゆく秋を惜むりり

冬古白集冬之初

初冬

初冬に横子入るやこりさる

時雨

極なうし 杉の志のくや 初しと道  
秋風と養子乃らりて 初時雨  
色くぬ葉ふふ家なるを 時雨  
雪の笠さうし 雪は月志く水

市中を菊菫深く志すは

秋夜

傘たむむるを志れ初時  
と朝月色を松の系法とる時  
秋もさうく我を發歸る時

小春

祖師達の志日くを小春  
系を踏くおをく悟む小春

山を今燃支の系小春  
波をさる目くよく細く小春

強河のくくく時

舟を川に流すをり小春

十夜

我意を染るをり十夜

口切

口切や若此價も唐小

芭蕉忌

百回忌と七年の今より一ひびきにて  
深川要津より傍塚遠立の折々西と人の  
花の泣く我死人と海と道と思ひせて

我祢りふ小妻のしやや 十二日

強河路や急稿も糸の白ひとりのり  
桃舟まうし無行ありき

ま世成忌や版をゆりの茶よ滞ん

掛川より野水布とまひひ

冬枯や人ぬハ葛れ居るあつも

落葉

又春の来くとも思へぬ落葉は

雑冬

さひしほの眼れけ方や石菰の意  
十月のあついとや花をさる  
たぐへて罪をさ菴の干菜うか

枯柳

枯柳 幾れ版しけり



枯くても身を折の浅敷可那

冬牡丹

富りともあつたりん冬牡丹  
喜なく染れあま戸や冬牡丹

枯野

牛の尾れ外とくとうぬ枯野  
るとんそ一里ハ事こり枯野

鶺鴒

夕暮れ藤のそよ紀やそよそよ  
んぬよりよ相捨りせんみぢこお

冬籠

仄占より先何結んぬゆさりり  
おりいひうひて月見よ出ると冬籠

改元

おりのきり地まの末のちやうと  
まふとありふ日もありうと改元

夏子似くうつも白く一帯死

大桶

こゝは居る宮女の中より大桶の家

巨艦

獲るく次これやこの巨艦の家

長居して巨艦も園子ある秋うれ

極楽に及くふと也ここの川の家

風

木枯や漣白川そのハ舟をうり

風よりこころ一棹そ志のこころ

水仙

河井の若くは流次有仙死

路中

きう猿を先解列く攻中うれ

傾城の市よりうき道で路中うか

糸を鳴くく月夜に攻中うか

紙子 食

羽二重の糸は暗成ある紙衣うれ

客ハ十日の糸をゆきハ十日の糸を煮

客此来より秋も喜ある紙子うれ

老学菜

戸うぬを我綿作り紙衣うれ

菜大根煮んく老と甲かりん

細代子

世より糸のそとこ細代子

ぬくぬく

糸をぬくもありぬくぬくと

何の時を一人の漢や熱く免る

顔の世

顔の世の中粉白粉も菊の糸

うけをや紙の糸を此種の声

髪糸

髪をやはりと死さける肩は静ま

る

減乏の門多くをりおの声  
指すく指さるりくおの声

氷 流る

障子たるうられあやう川氷  
鴨を——おの氷いほこま  
一糸——ハ入日乃氷柱う静

炭

賣よりも炭人を——炭二株  
文るおや炭りて炭をくく喜

櫓火 舟延七面山うて

櫓の火や祖師の胡座も眼のあを  
不この火やおははるる老をり

水鳥

をう一羽離ふまう川に鴨乃声

乳香巻れちまうりや雷の衣望らり

雷

押分て月こそ出さむとちとを  
とと本もちる相出きて雷うれ  
蛤りあ〜〜とと子なるか  
うとくはよ居てと〜居るをむ〜雷  
子多啼れや若月此照のこ〜  
友忍そと月表の雷嬉〜心は

吹よそく汐くりりゆくちとりうを

雷

とり〜心を忍てと風あり表の雷  
降く〜と雷のお多やあ〜と海  
雷と月言れ〜とや心と月松  
雷折川起川掉さす小舟うぬ  
白雷の中よ灯と〜と抱さうぬ  
雷白れ曇さ〜と〜とあ〜の雷

白雲下

六

備中対と

掃ふせん君のさ清くまきき建平

途中吟

ちるうる大よあさりりり秋のき  
留なく八百屋さうきや夜乃き  
養院て平より清きり君の友  
まのうき飯くみ君の阿〜うき

秋扣

秋たき月秋を忍えて後あり  
君ふとわりふ秋もあり秋たき

秋掃

ちるいぬのひとせき秋あり〜掃町  
ちるいぬと〜

袖のきき養もゆ〜掃

衣配

と年あはれ裁ん去年何り衣配

年内立春

おとこも去る年もいふる柳の如

年内立去の日年日ささきりし柳  
あさきさき

春の目をかりて桜もやさしき事

年忘浅来る 桜の本れるより

夜もよらむ年こそあれ井ハ他家

終りし年あつた志のいさよむり  
森さるる年居のうら

之をを唐山北西やらしぬる事

光陰と知り

かくて世と離れくるなり年の暮

年波の浪とあそぶはさきしけ

我家の戸を家家の舞よりきて藤鹿の  
桜いを書らふ猶よりくさり

金銀れさすりし柳の柳さうか

浮破利の氷より川を柳さうか

起るれと見えく雲葉柳さうか

酒肆ハ舞より白たう柔舞ハ舞より志け  
し柳さうか友のさけしうさく

鼓屋と浮世かきむさしぬる事

節分 系屋

鬼ハ外丹を肉ととらるおくれ  
厄拂 跡とら後ちと月夜  
大豆売と七歩の吟や屋くさひ

室紅

さう〜ゆね風此去〜ぬ一石うぬ  
空此名跡懐中んと入来るあまの昔  
中の書あり許をよととある或とあはれ  
琵琶をさひ〜く翻ハちかやつたり

義のさしり店の校うよ多〜う〜船

こせりおの縁縁〜て花の食の下外せー  
姉の脊山の付もすのあ〜りさ〜る縁を

橋本と色〜〜と文や古〜〜

碁依の風依をう〜の美織の系縁と  
〜〜

質ととくお〜り丹あり年のおる

東方未明衣裳轉倒

袿成の蝶ととくお〜り年の暮る  
阿〜を〜〜〜〜〜か曉〜〜〜



さすくさすく喜なき〜成ぬ〜こ〜

風鈴とき〜時中〜此名跡の家

松の嵐

古歌子集に出

藤太

今茲丙子年六月廿六日我師吏宅翁の  
一周年のついで像前より時某の眞秋体  
紅涙母を深〜護てる其よ若鳴呼  
不佞氣を去る〜時不幸〜て菊を  
負〜りあ〜りた故室の梅ハ昔ながら此花  
芳〜り水と朝と〜しく此秋風は昔  
終〜り世と墨深の袂も〜とありひよぬらハ

かのいづ海の中はゆるうふとよまけむ人乃  
んちる一——うまき中にも御遊の程を  
好く隠遊のおりいふ——とされと浮世の媚は  
臨遠にていづこ向上一路をた——さりて  
一日蟻考老人と新吉の境を編むるや  
及く深川よけ所ある事を志りぬ南人の  
指車を得るん地——とゆせの二日とてよ山舟  
ととめく、旅どきとる故人家在楳花家と

はくまの日のよそほひあふ——とてはあつを  
たけんと、王使まの度よりりちりと遊を  
まうけ寛後や、終る、家母所才の思紙  
そり、おる、青葉入平舎を、あひく  
影を探る、その、雛を、試、終、あ、る、と、一、是、そ  
所、思、の、始、あ、り、ける、今、を、紙、使、よ、ま、て、懐、旧、母  
腸、を、ち、こ、う、る、是、下、り、り、月、名、花、時、を、年、は、福、を  
月、よ、ま、う、て、て、正、芥、を、あ、ら、思、ひ、あ、り、て、奥、の、

細尾のたたとく酒やしく暇中入る柳をめて  
 千重や言はうしく秋より末の初穂心にと  
 役かうじんをさあはるは是うしめせよとまじし  
 神のまきのむ乃厚れ彩む方よみ去てたをふ  
 け秋を玉川のあまふけり言雄の神を神の  
 面目ふしく神は月のまゝめいほりまゆりぬ  
 手は柳を深川よいさうくわを川上とこの川  
 下や月の女とをせ成氣の中ささくみま松も

程ちうとあはりよきさうんく草堂を結く  
 ねくむうてけりあまを物言登のこふしそ  
 田吏の懐歎着西糸の昨軌をのりうまかすふ  
 ちうあふの山くハ麓下消常はあうりまそく  
 ちうくまはれとこの店守せよとねさ  
 たまくるより信る言ハ人よ懐あくよま葉つとあ  
 らくま年も言よけりるて葉を松陰よま  
 ちうハ卯月神のこさく小名木川を山くまらえ

先龜戸の瑞籬をぬく川子も去途の来をいひのや  
な舟師もけしと見え遠路く楳柳の吟あり  
折くれ麦の穂あまきくまに実貯るを  
はく梅も唯うけりあるうとく離別のあま  
胸よせまうりあまじ実其秋や折りひいでぬ  
小をけるのふのうみ侍も武江の本所ある川  
くしらの人真狂態とあるのおそきあてりこの  
志まの菅社あましくをねとせりあまき

あまきりさねを老師のまゝ来あまきとまき人  
かの人いうは眼のあんとゆきのまをなま  
万里を隔てて風もむう馬もおまうり  
そく山うけく浦ありあまきりかくて  
江戸府またま入り十月六日の夕月あまきり  
先は東門のまきりあまきりあまきり  
師もあまきり海う文月七日のみあまきり初乃  
瑞籬を告うりあまきり途中あまきりあまきり

ぬるよと唇をけさるくまがしるくも面阿のせ  
くまよとよるくくる時も充ちしん後ともをまより  
そよより漸七とせあまり八とせう即といはたす。  
吾を古神よめく吾春秋も二十あまり一指を  
歴ま阿の師と古稀の齡を跡よあしうの  
蒼くたる髪ハ化して白く初揺くる齒ハぬけ  
落より歯こくにあまむむき白頭の高ありと  
年よりまうちやされしは冬門人れあははハ

吾母まうせ國西の一句よ高花真人の風を慕ひ  
蓬の心をさけらまよりさよと羨むを去年乃  
まハ後河路や急橋れ首を志くく人々の指よ  
はんく舟月舟舟の境ハまよまよまよと書きた  
ふま師のいしはさをおとらうまよとてんまよの  
旅をささかうく吾又散枝の歌より暑湿の心  
阿りく漸氷を月の初葉を魚よまよりくハ入ぬま  
まうく志くはうあまりあまり水只縛ままより

空よをむの悔みかへらぬ日殺もはりりて  
今年を射る日をねりふ古人もつるのあり  
言ははくまなく情を絶るるうへはつて  
五月五日の法より一日一口の飲仙を法へて  
ありのやうにまゐていさう師母を執ふ又は舞  
衣松子うまを信く肖像をうへてまゝ  
相見さ侍の門人近うてまゝ  
旧知の人と一章のまゝ向あつてまゝ

あゝんまゝまゝのハ何時のうねのまゝ  
松れあゝ

叢句集跋

守武の神告曰此詔ハ何トモサキ何トモ  
ニシト好ト云々云々此云種ヲ以テ何ト又世の  
中ニ於テ何トモ舞ヤホト初連詔ノ  
ホリト云々大事ヤ人ト誰トモ井ト  
ウケル時々云々セトまり此詔の存ハ何ト積  
佛乃孫ト云々云々云々ハホト此詔ト何ト云  
蝸牛の角此詔の免ト云々何ト云々此詔の

あは路よ叶竹くきはふの申も孫くり成  
却し廢まらるを氣むるハ西へを先達の志は  
あはて彼是かして何とて其常は乳酪と  
其花印を盛んるそ花がはし一か所して  
その常をゆりちし柳ふまかるハいほまはるも  
取まぬうや九つの病とのまよ三つは恥と恥一  
十七の句法とまうしかゆくのちふ葉とまうら  
何まこの安と定は事ハいほまはるまう人

堪能の人とまう句こまにまはるはる  
唯まはるそまはる秋の能すあはる  
句の成まるまうしんるまはる句く探ひ集る  
うまははひしまかりぬまうまはるまはる  
積まぬ一今とまう古まうまはる火水  
まはる異まは昔まうまはるまはる  
梢よ不心売のまもまうまうまはる  
積る朽葉のまもまうまうまはるまはる



あつゝふりぬきまふと今此中為るは句  
 橋本小杉すゝしんふふと流を以我業よと  
 〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
 此等の所望解いせははし〜と山林の乞  
 まして筆と云の

時明和六丑如秋時与葱月泉

本所三丁目 西村原六

日本橋二丁目 戸倉屋喜兵衛

雪中庵俳書目錄	書林西村文刻堂藏
續五色墨 <small>竹阿 宗隆 素九 班象 英太</small>	續百番句合 <small>馬光 史忠 評</small>
きんじり百負 <small>岩島撰</small>	芭蕉菴再集 <small>英太編</small>
新笈引集 <small>山幸撰</small>	朝此集 <small>桃祖撰</small>
附合小鏡 <small>牛家著</small>	三春日記 <small>英太述</small>
素砂子歌 <small>善成 孫永 著</small>	画のこゝ <small>近刻 山幸撰</small>
歌時百負 <small>近刻 吏中著</small>	其角文集 <small>近刻 英太撰</small>
芭蕉菴附合集 <small>英太撰</small>	及川存たふ <small>近刻</small>
住吉千句 <small>一冊 英太 吐月 夜卷</small>	蓮花會 <small>三冊 英太撰</small>

秋山家

夜名撰

嵐雪翁句集

全二冊

史登母翁句集

全一冊

蓼太翁句集

增補 全二冊

去( ) 柗

曲川翁句  
近長壽仙

六憲翁句集

高申房  
社中

高申菴附合高憲集  
三絡撰 一冊

神出( ) 詠

南丸 一冊

葵乃( ) 亥

莊丹 一冊

蓼太翁句集二稿

近刻

七 柗

貞徳次部 續虛栗  
宗因虛翁 未末記  
六通葵太 獨吟  
附添二十六歌仙并翁句

書( ) 卷( )



